

公益財団法人日米医学医療交流財団 留学助成

研修報告書 (2018年度 助成者)

作成日 2018年 8月 20日

氏名 (フリガナ)	野中 沙織 (ノナカ サオリ)
研修先機関名	Hawaii Tokai International College
研修期間	2018年8月13日 (月) ~ 8月18日 (土)
大学名	久留米大学
学年	6年

今回の HTIC での医学英語研修は、患者の問診から **Case Presentation** を米国の医学生と同じ形式で行う訓練を行った。午前は医療倫理のクラスと問診のクラス、午後は病院見学や **Special Lectures**、夜は、ハワイ大学 (JABSOM) の医学生を相手に問診を行い、1対1で日本人・外国人医師に実際に **Presentation** を行う機会が設けられた。

午前の医療倫理のクラスでは、1日1本、15分程度の映像教材を見て、各グループで問題や対策を話し合った。1日目は高齢者の **Advanced Care Plan**、2日目は障害をもった新生児の手術に関する保護者の自己決定権、3日目は虐待をする母親の異所性妊娠に伴う、同意を得ない断種手術の是非がテーマとなった。カナダのビデオがテーマとなったため、社会精度や文化・宗教的背景など推し量るのが難しい場面もあったが、日々テーマが難しくなるため、参加者同士で悩みながら議論を行った。最終的には一人で決めてしまわないことが誤った判断をしないキーになるという結論に至った。

一方、一連の問診~**Case presentation** を行う練習は、数多くの医師と JABSOM の医学生の協力の下行われた。**Case Presentation** は JABSOM の学生に問診を行い、日本人・外国人医師に、自分の問診結果を鑑別診断まで含めて **Presentation** し、いただいたフィードバックを受けてブラッシュアップし、もう一度別の医師に **Case Presentation** を行うという流れだった。英語で問診を行う経験という意味でも非常に勉強になったが、何より日本語よりロジカルな言語である英語で **Case Presentation** を行うことで、病態の関連性をより構造的に捉える機会となり、医学という点でも今後の研修に役立つものとなった。複数の医師からフィードバックを受けることで、各医師のバックグラウンドに影響されることなく、一定以上の質を担保し、**Presentation** の精度を上げる上でも非常に有用であった。鑑別診断を挙げながら一つのケースを聞き漏らしなく問診するというのは、数をこなしていない医学生には難しい部分もあるが、特に大学の内科の **Clinical Clerkship** 前に(日本語でもいいので)このような機会があると、卒業時の医学生の臨床能力は向上するのではないかと考えた。

夜間のセッション終了時には、JABSOM の学生も交えて **Case Presentation** を聞き、その診断と病態を考える時間が設けられた。日本人学生が夕方のセッションで聞き取ったケースだったのだが、JABSOM の学生がほぼ一発で病態を見抜いた日もあり、その能力の高さ・勉強の質の高さに舌を巻いた。

本研修は自らが医師となるうえで医学的な勉強になったことはもちろんだが、医学教育への考えを深める機会ともなった。一人ひとりの学生に対して労力をかけて医学教育の質を上げる、**Education is giving** というマインドは日本ではまだまだ不足している視点である。**Special Lecture** の中でハワイ大学の町先生も述べていらっしやっただが、日本の医学教育はまだまだ改善の余地がある。もちろん、日本人の得意とする優しさや行間を読み取る力も大切なのだが、**Critical** に考える力を養う機会は少なく、病態生理に対する理解も甘かったと反省する機会となった。幸いなことに、私は現在、久留米大学で医学教育の改善について考える委員会に所属している。今回受けた教育や、JABSOM の先生から伺った医学教育における **Social Justice** の必要性を持ち帰り、後輩たちがよりよい教育を受け、日本の医学教育が少しでも向上するように努力したい。

最後になりましたが、本研修を受ける機会を設け、経済的な面も含めて多大なるご支援をいただいたみなさまに心から感謝を評したいと思います。ありがとうございました。